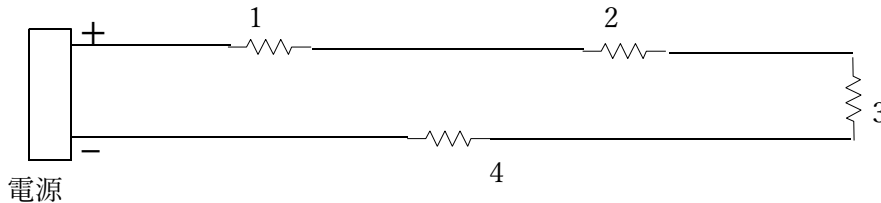


新電磁理論と未知エネルギー

2012.8.27ユビキタス発電研究会 田村良一

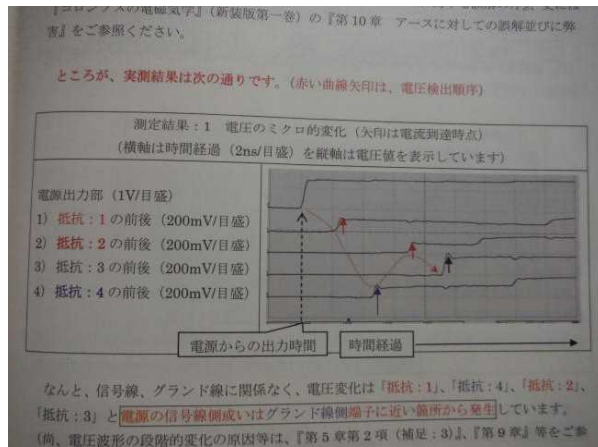
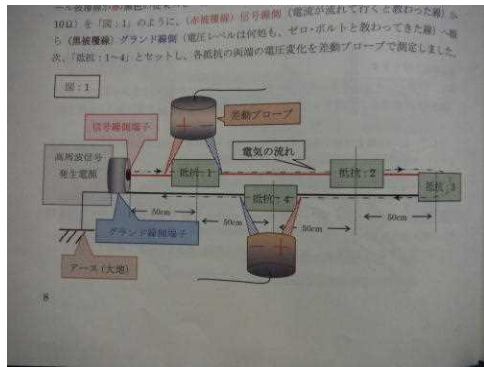
以前、発表した、宇佐美氏の電磁理論をもう一度、掲載します。

電源のプラス側からマイナス側に向かって電流を流し、途中、1, 2, 3, 4, の位置に抵抗を入れて、各場所に電圧が到達する時間を、差動プローブを使って調べた。



既存の理論によると、電圧は1-2-3-4の順に伝わると考えられるが、実際測定してみると、意外なことに、1-4-2-3の順に伝わるのが分かった。

実際の測定結果を次に示す。

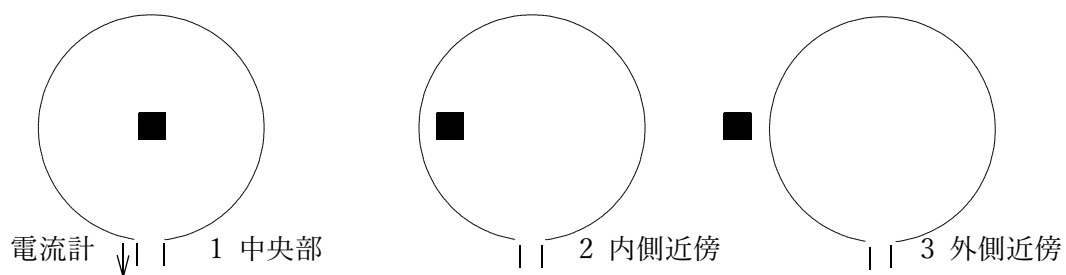


伝達速度は、20cm/nsつまり20万km/s であった。ほぼ、光速と同じということである。また、4のところはマイナス電圧になっていることから、プラスとマイナス側から同時に電流が流れ出すと考えた。つまり、プラスとマイナスの2種類の電流が同時に、反対方向に流れていくというモデルである。しかも流れるのは電子ではなく、電磁子と命名した、量子が光速で流れるということである。これは電線に沿って電磁波が流れていくということと同じである。電子も、少しは移動するが、これは、ちょうど川の流れに沿って、水草が磨くのも同じで大きな動きはしないということである。

実際、遠くにある変電所に電気を送ると、ほぼ、光速で到達する事がわかっているので、この説は、ほぼ、当たっているのではないかと、思われる。

また、ファラデーの電磁誘導の法則 $V = -\frac{d\phi}{dt}$ についても、次の実験から、磁束の変

化によって電圧が発生するのではなく、導線の反磁性的性質によって起こると主張する。次のように、エナメル線のリングに磁石を上から落下させたとき発生する電流を測定すると次のようになった。



直径10cmの場合は、1、2、3ともに発電されたが、30cmの場合は2と3は発電されたが、1の場合はほとんど発電されなかった。

この結果から、磁石が線の近くを通過したときだけ発電することが分かった。つまり、電磁誘導と思われた現象は、磁性体が導線の近くを通過したときに起こる現象であることがわかる。

また、トランスの原理についても、1次側にsin波を入力すると、これを、微分した値即ちcos波が2次コイルに出力されるはずだが、実際測定してみると、全く同波形となり、電磁誘導の法則が成り立っていないことが分かる。

では、世の中に、未知のエネルギーという物が存在するののかということだが、1959年にイスラエルのアハラノフとアメリカのボームによって提唱されたベクトルポテンシャルという物理量があるが、これは、かつては、物理の問題を解く便利な単なる数学量であると思われてきた。次の式がマックスウェル方程式をベクトルポテンシャルを使って表したものである。

$$E = -\nabla \phi - \frac{\partial A}{\partial t}$$

$$B = \nabla \times A$$

A がベクトルポテンシャル、 ϕ がスカラーポテンシャルと呼ばれるものである。

これが実在する物理量かどうか、1970年代に激しい論争が続いたが、1982年、日立製作所基礎研究所の外村彰氏の研究グループが超伝導と電子ホログラフィーを使った最新の手法で、これを、疑いの余地のない形で検証することに成功し、この論争に決着がついた。

これは、通常の電磁場測定器では、測定できないもので、第3のエネルギーといえるものである。

なお、プレアデス系の惑星から来ているという、宇宙人の科学では、原子とは物質生成の7元性の最高段階であり、他の6段階の物質については、6番目の水準の素粒子、5番目の水準の半端電荷粒子（クォーク）まで、ようやくたどり着いたところで、第4水準以下の物質については、ほとんど無知の状態だということである。なお、第4水準以下の物質は、純粋物質とはいえない物質、即ち非常に微細な霊的エネルギーであり、純粋エネルギーから、7つの変化過程によって粗物質が発達するとのことである。

つまり、我々が知っている、物質およびエネルギーは、ほんの一部であり、ほとんどのエネルギーは未知であるということである。

現代科学では、電子は粒子と波動の両方の性質を持つとされるが、もし、電子が、上の7段階の状態を、極めて短い周期で変化しているとすると、2重スリットを通過するとき物質の状態を通過するときと、波動状態で通過するときがでてくるので、直進したり、干渉じまをつくったりする理由の説明がつかないか。



プレアデスの宇宙船